

気づき合う講座『ダイバーシティ・スイッチ』 「ダイバーシティをSDGsとLEGO®で考える」開催報告



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



ダイバーシティ・スイッチ

2018年8月31日(金)にアスト津のみえ市民活動ボランティアセンターにて、今年度第3回目となる気づき合う講座「ダイバーシティ・スイッチ」(主催:三重県)を開催しました。当日は、企業、行政、NPO、個人などさまざまな48名が参加し、ワークショップ「地域で活かすSDGs はじめの一步」を通して、ダイバーシティについて考えました。

ダイバーシティをSDGsとLEGO®で考える

第3回目は、ダイバーシティをSDGsの視点から考えるワークショップを実施しました。テーマは「地域で活かすSDGs はじめの一步」。

SDGsの理念には“誰一人取り残さない”世界の実現があります。この実現には、ダイバーシティを活かすことも必要な要素です。一人ひとりが個性を活かし、自分らしさを発揮できる社会にするために、地域では何ができるのでしょうか。SDGsの概念を、Googleをはじめ日本の大手企業でも研修などで多く採用されているメソッド“LEGO® SERIOUS PLAY®”(※)を活用しながら体感し、世界の課題を「身近な社会」や「自分」に落とし込んで考えました。

SDGsとは…

Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標と訳される。

2015年9月の国連サミットで採択された、国際社会が持続可能な世界を実現するために、2030年までに達成すべき目標のこと。



※個人や組織の価値観やビジョンといった形のないものをLEGO®ブロックを使いながら形にして、新しい気づきを得る思考メソッド。



ダイバーシティ・スイッチとは…

三重県では、一人ひとりが尊重され、多様性が受容され、違った個性や能力を持つ一人ひとりがよい意味でお互いに影響し合うことで、相乗効果を社会に生み出す「ダイバーシティ&インクルージョン」の意味も込めて「ダイバーシティ」の言葉を使用しています。「スイッチ」は「切り替え」という意味です。今年度は、社会の多様性を知り、他者との対話でふり返る(視点や考え方を切り替える)講座を通して、自分や地域社会の中にあつた偏見や固定観念に気づき、多様な社会に切り替えていく気づきの場として「ダイバーシティ・スイッチ」(全5回)を開催しています。



講師／井澤友郭(いざわ・ともひろ)氏

こども国連環境会議推進協会 事務局長

ワークショップデザイナー。LEGO®SERIOUS PLAY®公認ファシリテーター。2003年から「正解のない課題」に「探求的に挑戦し続ける」人材育成を目的としたワークショップを開発し、年間150回ほど開催。延べ2万人以上の学生や社会人に指導してきた。子どもだけでなく企業研修など大人向けにも多数実施している。

SDGs×ダイバーシティ

「誰一人取り残さない」という目標を掲げるSDGs。その社会の実現には、ダイバーシティの推進が不可欠です。当日は、SDGsの研修などを担うファシリテーター・井澤友郭さんから、レゴを使ったワークショップを通じて、地域でSDGsをどう活かしていくかを考えました。

SDGsの特徴は、これまでの平均値を上げるようなアプローチではなく「誰一人取り残さない」という“世界観”の言葉を掲げていることだといえます。なぜこのような世界を作らないといけないのでしょうか。背景には複雑に絡み合った社会課題があります。例えば、「教育(目標4)」の視点から見ると、モザンビークでは、小学校を卒業できる児童数が入学時に比べて7割減るという現状があります。その背景には、女の子が水を汲みにいくための労働力として使われている「水問題(目標6)」「ジェンダーの問題(目標5)」などが絡み合っています。これらの課題解決には、1つの視点からだけでなく、複合的なアプローチが求められます。井澤さんは、このようなSDGsのアプローチは、他の課題解決へ向けたヒントのツールとして活用できると言います。

なぜレゴを使うのか？

井澤さんは、レゴを使うことで「違いの見える化」ができ、違いを前提としたコミュニケーションが自然と学べると言います。一般的なグループワークでは、付箋に各人が言葉を書いて示すことがよくありますが、例えば、複数人が「つなぐ」という言葉を付箋に書いた場合、言葉が同じであるため、本当はそれぞれの解釈が違っていても気づかずに終わってしまうことがあります。しかし「つなぐ」をレゴで表現すると、何をつなぐのか、どんな風につなぐのか、といった違いが明らかになります。「自分の見えている景色は、自分しか見えていません」と井澤さん。「ワークショップでは共感も大切だが、かすかに感じる違和感も大切にしてほしい。ワークを通じて人との違いを発見し、違いを楽しんで」と語りました。

ワークの前半では、レゴを通じて感じたことを伝え、違いを見つけるための練習をしました。1つ目は、お題に合ったブロックを1つ選ぶワークです。参加者は配られたブロックの中から、「今の気分」「好きなもの」などお題に合うものを選び、選んだ理由を3~4人のグループで伝え合いました。同じブロックを選んでも説明が違うという体験から、見えているもの(事実)が同じでも解釈は1人1人自由であるということ学びました。

2つ目は、それぞれがブロックを組み合わせてタワーをつくるワークです。完成したら、タワーを自分自身と捉え『自分らしさ』をブロックで足していきました。配られたブロックのセットは全員共通ですが、同じタワーは1つもありません。参加者は、レゴを自分に「見立てる」ことで、他人との違いや共通点に自然と気づいていきました。

SDGsをもっと身近に

井澤さんは、SDGsは世界規模の話題のようだが、もっと身近なものであると言います。例えば、職場・家庭・友人関係など身近な場所であっても、自分らしく生きていけない人は、取り残されているともいえます。

世界からみた男女平等ランキングで、日本は114位。日本におけるLGBTの割合は13人に1人。25人に1人は何らかの障がいを抱えている…など具体的な数字から見ると、世の中には見た目では分からなくても違いがあることで困難を抱えている人がたくさんいます。井澤さんは、一人ひとりが自分らしく生きられる世界をつくるには、一部の人が頑張るのではなく、“全員参加”じゃないと世界は変わらないと繰り返し伝えました。

後半は「取り残されている人」に自分は何ができるのか、順を追って考えるワークを行いました。まずは、参加者それぞれが「私の仕事において一番大切にしていること」をブロックで表現しました。どんな社会への影響力をもっているのか、社会との接点をイメージしながら様々な作品が生まれていました。次のステップでは「自分の周りで取り残されている人」をブロックで表現しました。そしてグループの中で、それぞれが作った「取り残されている人」がどんな関係性やつながりがあるのかを対話しながら考えました。最後のステップでは、ともに輝く社会をつくるために、自分の仕事が、取り残された人たちに何が提供でき、どう関わっていけるのかを、ブロックを並べたり、対話しながら考えていきました。

井澤さんは、最後にSDGsが掲げる「誰一人取り残さない」という誓いと、ダイバーシティみえ推進方針の「ともに輝く」は共通しており、世界を変えていくために、仕事や活動をぜひSDGsの視点から見つめ直してほしいと伝えました。

各人が、世界を変えていく「はじめの一步」のヒントを得たのではないのでしょうか。共感とともに、人との違いを発見し、違いを楽しみながら、身近な仕事や活動を見つめ直すことができたワークショップとなりました。

★「三重県がめざすダイバーシティ社会」とは…

「性別・年齢・障がいの有無・国籍・文化的背景・性的指向・性自認などにかかわらず、一人ひとりが違った個性や能力を持つ個人として尊重され、誰もが希望をもって日々自分らしく生きられる、誰もが自分の目標に向けて挑戦できる誰もが能力を発揮し、参画・活躍できる社会」と定義しています。